

末黑野

すくろの

4月号 (通巻860号)



春寒し

寒灯や天金くすむ智恵子抄
崖道の展けて海や八重水仙
夕日の色胸に留めて枯野道
裸木に星裸木の細けれど
冬木の影にわが影重ね孤独なる
冬の海その静けさを独り占め
長き影踏めば影逃げ冬の浜
風光る松韻籠もる御用邸
春寒し池の小石の苔むして
郵便受けまでの六歩や冴返る
町川を流るるひかり春めきぬ
下萌や髭題目の碑の大き

松本三千夫

牡蠣打

着水の光を散らし鴨数羽
日向鴨機嫌の尻を振りにけり
羽音よりはじまる池や初明り
犬の字のちぢみて乾く吉書かな
決まる道決まる社へ初詣
枝ひとつ飛んでまた飛ぶ初雀
年新たに日差しへ一つ椅子を置き
揺るる葉の池に映りぬ寒四郎
ちやんちやんこ善人らしくなりてをり
牡蠣打や島のどこにも風の音
降りてやみ止みて降る雪遊園地
松の葉の律義に雪を置きにけり

黒滝志麻子

(副主宰)

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

除日

石黒興平

羽子板市売手買手の三世代
羽子板市暮れて人出の華やかに
幸せの包み羽子板市の帰路
数へ日や水もて掃ける魚市場
発電機のひねもす音や飾売
青藁の香りを展げ注連飾る
ブレーカー落ちて騒ぎの除日かな
雲ぬげばかくも眩しき初日かな
毎日が佳き日に見えて新暦
一振りにこむる力や斧始

白鳥

田中臥石

海鳴りや妻の一打の除夜の鐘
快晴の元旦酔うてしまひけり
同郷の酒あれば足る賀客かな
松の内明けていきなり根深汁
白鳥のこゑや下総印旛沼
白鳥へ餌付の翁声発す
田を渉る白鳥翅を開きつつ
白鳥を指して囁く妻の声
白鳥の沼や相和す夫婦旅
雪降つて足が重たくなりにはけり



清 晨

森 清 堯

先延ばしの約ばかり増え十二月
些事なるもすぐに済まさむ年の暮
一天の雲重たさう大晦日
ブラインド一気にかけて初景色
西窓を額の初富士祝膳
秀を競ふ落葉松並木初茜
やはらかき光あまねし初景色
清晨の息ふかぶかと大旦
よく通るコーチの声や寒の入
冬満月巨きく載せて安房の山

霜 の 声

森 清 信 子

初春や太き枝張る五葉松
銀箔の富士の頂淑気満つ
車より彩りこぼれ春着の子
恙無きを喜び合へり初句会
星空の音なき世界霜の声
グランドを均す少年冬夕焼
夕照のかけらをまとひ朴落葉
裸木や転がるやうに駆くる子ら
風はらむ帆は沖へ出で冬鷗
棒読みの如き暮しや冬ごもり

冬木の芽

安齋久英

冬紅葉映す早瀬の櫓音かな
したたかに湯宿の軒端夕しぐれ
車椅子の背に話すや霜の道
葦枯れて沼は風音ばかりかな
満天の星研ぐ峡の虎落笛
真向ひに寒オ里昂や湖の闇
稜線の闇深めをり冬の月
恵方道辿る潮の香総身に
富士を背に秋谷立石冬茜
初日待つ雲の縁どり菊水に



乙 矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



ミルクテイー

斉藤マキ子

新 曆

菅野日出子

たはむれに鍵盤叩き待つ聖夜
プランほど進まぬ掃除新曆
豆柿に鳥かげのなき空の碧
囲ひ葱抜くやかはたれ刻の月
寒月やタクシー待ちの長き列
月光へ客送り出す二日かな
二粒の草石蚕残るや三の重

風の色

堺 昌子

里山の日を存分に冬紅葉
夕日影池面を移る鴨の陣
休み田の風の色とも冬芒
子や孫の一人も欠けず雑煮膳
初日の出をろがむ指のささくれて
七草粥の芹たたく音妣の音
百合鷗シーバスへ手を振り返す

恵方

吉田きみえ

切山椒

岡田史女

八方に筈散りけり山眠る
躓ける小石の先の恵方かな
笹子鳴き森の深さを明るくす
竹さやぎ見下ろす溪の冬紅葉
落暉いま枯野づたひの貨車長し
落ちてなほ紅濃き雨の冬椿
枯るるもの枯れ日溜りのすべり台

元朝

今村千年

正月

岡野里子

風花や画廊を巡る裏通り
古書店を出づや神田は風花す
あの人の佳句に出合ひぬ冬ぬくし
元朝や街の高みの富士見台
元朝や富岳阿夫利嶺ひかり合ひ
子ら集ふ年酒そのまま酒盛りに
嬰兒はや石段数ふ初詣

裸木となり電飾の綺羅いよよ
立ち上る篝の炎除夜の鐘
益荒男の背や破魔矢の鈴の音
正月の顔正月の膳につき
正月の凧大空の窓となり
行く末は丸く生きたし鏡餅
しぐるるや墨痕著き朱印帳

いらご崎

今村千年

曾我墓所も御殿場線も梅のな
梅が香や斜陽ゆかりの寓居跡
桜よさり桜へ渡る渡し舟
いくさなき七十年の花見かな
説法の佳境に入りのぬ目借時
掌のスマホの滑る目借時
鳥引きて鳶の自在やいらご崎
潮騒の島の寄せし渚や花とべ
椰子の実の朝の海平らなる
縮飛ぶや実朝の緩び紅葉晴
露座仏の法衣の緩び紅葉晴
露座仏の耳朶や秋冷俄かなる
犀星の遠きふるさと雨けり
ざわさわわ八重の潮風甘蔗刈
さしば舞ひ日はシナ海に沈みけり

初音

及川照子

埋木 渋送 外銀 銀甲 土文 荒戦 桜紙 瀬
 み の 柿 り に 河 ぶ 斐 臭 人 磯 な き 散 雛 音
 火 の や 火 の で き の ら の き の の 波 の 世 を 知 目 よ
 を 癩 に 悪 の 消 て 賢 ブ 葡 の か の 永 を 覧 の 鼻 り
 お 夕 妻 だ え た る 風 に 治 の ジ 萄 萄 連 り の 高 ら に 無 折
 こ 日 の つ た か 空 や 星 秋 思 湯 かな かな かな かな かな
 し 親 の 寒 し も 風 知 れ と かな かな かな かな かな かな かな
 峡 風 寒 し づ つ な かな かな かな かな かな かな かな かな
 の 宿 し づ つ な かな かな かな かな かな かな かな かな

炎 帝

外山生子

浮氷日を弾きつつ揺れてをり
畦を塗る翁の確と鍬さばき
たかなのはみ出すリユック児の背負ひ
山里の泳ぎ伸びやかか鯉幟
青葦の刈られ川面の光りけり
梅雨明となるか雷鳴轟きぬ
炎帝の飲み込みにけり物の影
風の道さがせど見えぬ極暑かな
雲重く風冷やややかやバスを待ち
秋日差豊ぬくもる二人の座
秋の日の遍し寺の屋根の反り
立冬や米研ぐ水の手に硬く
ゆつたりと雲流るるや小六月
足元に枯葉転がる駅舎かな
晩学の急がぬ道や冬桜

処方箋

正谷民夫

さくくらの散る鉄砲狭間の丸四角
阿蘇五岳次つぎ暮れての麦匂ふ
太宰忌や梅雨蝶二つ纏れぬて
歌垣の山分け入れば揚羽蝶
殺し場に抛る御捻り夏居
秋立つや秩父武甲は石の山
バス停に未だ来ぬバス原爆忌
悲しみを去つと蒐めて鶏頭花
茅屋根をはずぶと濡らして秋の雨
秋天より降る高跳びのひと秋
眠剤を母に割りやる夜の半秋
夜神楽や天鈿女命の指太き
踏む影のみな美しき冬日かな
冬天のあやふきほどの蒼さかな
処方箋の薬よく効く十二月

紅梅

森一枝

初東風や五山の空の雲置かず
 青竹の柄杓の香り初詣
 校庭に真向き背きて水仙花
 まんさくの花の調ふ微風かな
 灯を入れて紅梅の色深めけり
 夕刊や沈丁の香の深まりて
 活けられたて花菜満開早めけり
 河川敷のサツカーの子ら風光
 夕桜映す川面の薄明り
 吾が肩に芽吹く柳や妻籠宿
 廃校の窓鳴らしをり青嵐
 故郷を忽と近づけ遠閑古
 棉吹くや雲か煙か遠浅間
 飯盛山の紅葉且つ散る苔むす
 菊人形案内のごとく武家屋敷

故郷

長尾タイ

葱畑畝盛り上ぐる老農夫
凸凹に剥きし十粒の栗御飯
反射の焔へ続く農道
母に似る案山子と交はす
たたみ来る波の秀先や鳥渡る
隠沼の音なき水流の鮎の里
蒼き山の蒼き流れの鮎の
溪流の浅瀬に放つ鮎の
伽羅路や猪口に溢る越の酒
雲の上の浮かぶ浅間嶺花林檎
奥の濃残雪光る山の綺羅
さ緑を流す芽柳水の綺羅
幼子の十指に握る春の風
水温む鯉も泥の鱒も髭生や
春耕や大地の鼓動打ち返す

新人賞受賞作品抄

梅雨の星

宮元陽子

花三分蓄を撫づる川の風
燕くる木材店の檜の香
風騒ぐ藤棚色香広げけり
頭上よ去り春急降下風光る
米艦の旧姓途絶ゆ梅雨の星
母逝きて旧姓途絶ゆ梅雨の星
夏薊葉擦れの音と木洩れ日と
宵闇や寺の座敷のシャンデリア
欠けもせぬ猿の腰掛野分
切り取るや葡萄の腰掛野分
百穴に風葡萄の渡りて花芒
後の月堀に映れりて花芒
秋の風からませてる車夫の足
落日の黒雲一朵冬立てり
札納人の形不可と筆太りに

竹の秋

山口郁子

和毛めく辛夷の花芽緩びをり
風の抜け日矢の抜けぬる竹の秋
そよ風の捲る頁や目借時
狛犬に日の斑のこぼれ青楓
寺の庭人との葩と傘の花
汗かくやスマホの棋士と駒合はせ
雨しとど百日紅の紅しづく
新しき風知る朝花すすき
行き合ひの切れぎれの雲風は秋
バス停の不揃ひの椅子紅葉冷
玄関子のメモのあり今年米
ひとりに居の温み奪ふや隙間風
小春日に予後のみ身預け深呼吸
まれびとと尽きのぬ話や相炬燵
初詣願ひと渦巻く宮居か
な

山笑ふ

山咲和雄

春炬燵意気投合の旅の本
指先と背すぢへせまる余寒かな
登山歴五十数年山笑ふ
混ぜる寿司にそふる花菜のからし和へ
時鳥の次の声待つ溪深し
父の日や考の写真に乾杯す
畦道を歩き行きの戻りつ夏燕
終りなき事と知りつつ草を引く
肩書の無き幾年や心太
鎌もたげ蠅螂出づる植木鉢
朝霧や今日の天気をうたがはず
男体山スキしにまさる山紅葉
落葉急スクランブルの交差点
山好きの少しうき雪の朝
玻璃越しに鳥の影おき春隣

みちのくへ

及川照子

秋うらら胸に描ける旅の地図
爽やかなる風と語らむ一人旅
鬼の子の気ままな一人遊びかな
天高し石の上に立つ立石寺
御仏のみそなはす山装へり
秋冷や崖また崖の修験道
嶮崖の仏の慈顔忍草
ご朱印の墨の香りや秋の風

三代の栄華の香とや金木犀
落日や古戦場めく敗荷田
水澄むや風のささやく浄土池
秋寂びし心に平家物語
灯を消して濁世離れて虫の夜
鳥渡る蔵王嶺遙か薄化粧
色変へぬ松の参道津波の碑
わたつみの深き眠りや台風過
旅の日の過ぎゆく速さ鱗雲
絵蠟燭燭夫に灯せる夜寒かな
秋霖やひとり籠りて旅日記
人生の午後を豊かに吾亦紅

青炎集

松本三千夫選



冬天へ人汲み上ぐる観覧車

横浜 芝田幸恵

セーターを脱ぐ折伏のさまに脱ぐ

白妙の高嶺まどかや初景色

初笑にぎにぎしきは出の囃子

白湯飲みて腸を宥むる三日かな

明けどきも暮れどきも鋭き寒鴉

横浜 及川照子

七転び八起きの年を惜みけり

海からの風まだ硬し水仙花

歌留多取りの櫂にかくる勝負かな

初めてや孫より受くるお年玉

海老蔵のにらみ壮快初芝居

年毎に妣似となりぬ初鏡

横浜 早川八重子

冬晴れや小女の髪のつややかに

路地裏の日差しやはらか冬董

肩の荷を下ろす如くにコート脱ぐ

曇天の垣を色どり冬椿

柚子の香の厨に残り年用意

切株の年輪美しく冬日向

横浜 北郷和顔

霜柱をポールに見立て男の子

古民家の手斧の梁や寵猫

菰藁に潮騒聴くや寒牡丹

ほどほどの幸を祈りて注連飾る

初富士の裾伸びやかに相模湾

孫二人の名を揃へるや箸袋

横 浜 聞 せ つ 子

薄紅の冬芽の尖り明の空本

みどりごの通訳欲しや日向ぼこ

月冴えて三千世界鎮まれり

冬夕焼宇宙の果てを誰も見ず

真夜中の社賑ひ初詣

音たてて火の粉夜空へ初詣

横 浜 前 原 マ チ

柚子の寄附募る銭湯明日冬至

近隣に支へられたり去年今年

舞ひ終へて口に祝儀や獅子頭

神木の間を初日手を合はせ

蒼天や白き鳥居の北風に建直子

ひたすらに夫君のもとへ冬直子すみれ

横 浜 有 賀 鈴 乃

温室の充つる色香や日の燦と

祭壇へ絵硝子越しの冬日かな

会場とプリマと和せる聖歌かな

茜雲の紫に溶けからつ風

神木の紙垂の真白や年用意

砂浜の長き影踏む冬茜

横 漢 布 施 由 岐 子

落葉して己の空をとりもどす

冬紅葉没骨法めく川面かな

北風を避けてさ迷ふ地下迷路

年つまる嚙下テストの誤嚙もし

初船や微動だにせぬ芙蓉峰

枅酒の木の香を吞むや初芝居

新 宿 稲 垣 佳 子

天を突く夫婦の樟や初詣

雪吊りの縄の小ゆるぎ雲早し

元旦や一献重ね齡重ね

寒の入榦の大樹のゆるぎなく

天恵といふ日だまりや冬帽子

をしどりの影を重ねて眠りをり

川 崎 田 中 繁 夫

茶の花の導顔なり奥の院

塔の灯と続く足音クリスマス

迫り来る忘却の波去年今年

石鉢の猫の水場に蟬氷

旅の宿軒の氷柱に手を伸ばし

海原の沖行く舟や水仙花

耕 土 集

黒滝志麻子選



蕎麦打ちや赤き櫛の大晦日

横浜 高橋 泰子

故郷のなくて吊すや干し大根
旅に出て朝湯に交はず御慶かな
寒夕焼に染まる駅前未来都市
午後からは雨となるらし寒ゆるむ

日溜りの少女の像や冬薔薇

横浜 長田 厚子

ビル群を映す池の面花八手
白壁の長屋門映ゆ冬桜

蹲踞の水音やさし年の暮
筆太の無事の掛軸冬座敷

さりげなく居酒屋に入る冬帽子

横浜 志藤 章

ペン皿の埃の白き冬至かな
冬至湯や常より長く手足のべ
赤玉をひきて微苦庶笑年の暮
薪の火のくづる音や除夜の鐘

足裏にも思ひ出のあり落葉踏む

横浜 渡辺美智子

月冴ゆる嘘も気取りも許さじと

横浜 池乗恵美子

冬帽の似合ふマネキン彫深し
前垂れの福の一文字飾壳
億の子の億の夢ある聖夜かな
初夢や若き己に励まされ

孫の手も借りて一先づ年用意

横浜 滝口 洋子

鳥一羽一声高き空冴ゆる
臘梅のふつくら匂ふ日和かな

はらからの疎開話の年始かな
牛日やパンダ横目に美術展

雪 兔

小川 玉泉

(名誉顧問)

初御空掲げし国旗ひるがへる
手放せぬシルバーカーや年迎ふ
中庭の池面を残し積る雪
千両の紅を目に雪兔
日を浴びてずしりと落つる下屋の雪
湯たんぽを頼る齡となりけり

雑記帳 9

今年の寒さは地球の北半球を包むほどである。湘南の海沿いも、雪に包まれ、人智の及ばない被害を受けた。地球の歴史からすれば些細なことだが、今を悔いなく生きたい。